

■特集「視交叉上核発見から 50 年」ご覧いただけたことと思います。企画を提案してくださった中村渉先生に感謝です。「発見から 50 年」ということは、当然その前にそこにつながる研究があったわけですね。長い歴史の上に立って、今日、研究をさせていただいているのだと思うと、身の引き締まる思いです。私自身が SCN の研究に携わり始めてから、幾ばくかの年月が流れています。今回の特集で取り上げられた研究のある時期から以降は、リアルタイムでその発表を目にしてきました。色々と思えばと感慨深いものがあります。

■本間さんと先生の総説の図 4A にあるカスタムメイドの発光イメージング装置。使わせていただいていた。あるとき、装置を別の建物の実験室に移すことになり、解体・再組立てを行いました。ご想像通り、再組立てに結構苦労しましたが、仕組みを理解するいい機会となりました。図 4B の写真。左側手前に写っているのは私です。左奥に立っているのは、おそらく榎木先生（現生理研）。右端でスライサーを使っているのは小野先生（現名古屋大）です。さすがに 10 数年程度では、みなさんの外見はそんなに変わっていないようです。

■千葉先生の訃報に接し、2 つのことを思い出しました。ひとつは、奈良女子大学の石研で使っていた「千葉くん」とラベルの貼られたペン式のイベントレコーダーのこと。千葉先生の研究室で使われなくなったものを「お借りした」と聞いていました。今回の松本先生の追悼文に出てくる「CARPs」の導入が使われなくなった理由だったであろうことが、初めてわかりました。もうひとつは、私が大学院生の頃、パリでの国際学会に参加したときのこと。どういう訳か、千葉先生と一緒させていただく機会が多くありました。なかなかお茶目な方だなあという印象を持ったことを覚えています。

(吉川)

■本稿は SCN 特集だけでなく実に多様な総説が入稿され、一方で残念なお悔やみのお知らせが重なったことにより、過去最高の忙しさを呈しましたが、その分、温故知新な号となりました。

■参加記などの執筆を 8 月の札幌シンポジウムで急遽依頼させていただき、快くお引き受けいただいた先生方、本当にありがとうございました。締め切りまで時間がなく、コロナ禍での開催や現地の様子が良く分かる内容になっているかと思えます。

■外国人の入国制限が大幅に緩和され、円安の影響を論文掲載費用で痛感し、物価上昇のあおりを受けてスーパーで悩むことが多くなった一方、徐々に日常が戻りつつある今日この頃。1 歳半になる娘が食事中ひたすら歩き回りまわり座ってくれない間、運動中の食事は肝臓の時計にどれほど影響を与えるのか気になる今

日この頃でもあります。

■12 月に宇都宮の学会で、例年より分厚い学会誌を手にした皆様とお会いできるのを楽しみにしております。寒さが深まる時期ですので皆様ご自愛ください。

(池上)

■6 年間編集委員会委員長を務めさせていただきました。小説家になることには挫折したのでいつか本をつくる仕事をしたいなと思っておりました。こんな形で実現するとは思いませんでした。■編集委員には原稿の依頼、催促、査読者の選定、査読の依頼、修正原稿の催促までお願いしてしまいました。また紙面構成や段組みなどの煩瑣な編集作業をお願いしていた吉川先生、池上先生には大変なご苦勞をおかけしました。この方々のご協力、ご尽力がなければ学会誌の発行にいたっていません。おかげさまでなんとか恙無く任を終えることができそうです。

■執筆者には“できるだけ個人的なことの記述をお願いします”とかなり無茶なこともお願いしました。結果、心ふるわせる文章が次々と手元に集まりました。学会誌、全文を HP で公開しておりますので“個人的なこと”を書くためには誹謗中傷や醜聞にならないぎりぎりの線を攻めていただくという名人技が必要です。しかしただただ見事でした。

■時間生物学の分野で多くの業績を残された方々の訃報が届いております。親しい方に追悼文をお願いしました。千葉先生、今回立ち上げた対談企画のリストの最初に名前があがっておりました。しかしコロナ禍のためにお会いすることができませんでした。草創期のお話を聞き取る機会を失ってしまいました。残念です。堀先生、研究に人生を捧げ多くの研究者を育てた方です。接してこられた方の思いが溢れております。お互いを高め合うつながりに心打たれました。工藤先生、時間生物学への思いを残されて旅立たれたのではないかと拝察いたします。無念ではなかったかと。生きて研究ができることがいかに幸せなことか。

■ほとんどを編集委員に丸投げしてしまいましたので私の功績は無いに等しいのですが最後に対談企画を立ち上げることができました。先日、高橋清久先生にお話をお聴きしました。次号の掲載になります。この企画についてはもう少し携わらせていただこうと考えています。“あの頃”の息吹に触れてそれを皆様にお伝えしたい。

■わがまを許していただいた学会員の方々に感謝申し上げます。またどこかでお会いしましょう（お前はどこにいくのだ？）。

(重吉)

時間生物学 Vol. 28, No. 2 (2022) 令和 4 年 11 月 1 日発行

発行：日本時間生物学会 (<http://chronobiology.jp/>)
 (事務局) 〒467-8603 名古屋市瑞穂区田辺通 3-1
 名古屋市立大学大学院薬学研究所
 神経薬理学分野内 (担当 佐々木)
 TEL/FAX : 052-836-3524
 Email : chronobiology.jp@gmail.com
 (編集局) 〒589-8511 大阪府大阪狭山市大野東 377-2
 近畿大学医学部解剖学
 重吉康史研究室内
 TEL : 072-368-1031
 Email : shigey@med.kindai.ac.jp
 (印刷所) 名古屋大学消費生活協同組合 印刷・情報サービス部